

# 在日ウイグル人<sup>1)</sup>の言語選択とアイデンティティ

— 自己確認機能を中心に —

阿不都熱西提 阿不都勒提甫

はじめに

言語とアイデンティティは密接な繋がりががあると指摘されている。アイデンティティ形成<sup>2)</sup>では母語との関係が最も根源的な例として取り上げられるが、多言語話者にとっては「母語＝アイデンティティ」<sup>3)</sup>という単純な公式が成り立たない場合がある。本稿は在日ウイグル人の社会構造と文化構造（アイデンティティ）との関係を、複雑な社会環境の中での使用言語の選択、および、教育言語の選択がもたらす生活使用言語への影響やそれに対する想い（意識）を中心に解明しようとするものである。

従来、中国新疆ウイグル自治区に居住するウイグル人<sup>4)</sup>については、教育言語の選択<sup>5)</sup>、アイデンティティ<sup>6)</sup>に関する研究、および、カザフスタンに在住するウイグル人の学校教育に関する研究が行われてきた<sup>7)</sup>。また、在日ウイグル人を対象とした研究としては、安瓦尔安蒂娜の生活実態に関する調査研究<sup>8)</sup>がある。安瓦尔安蒂娜は、[安瓦尔安蒂娜 2007]<sup>9)</sup>において、日本における中国ウイグル族の来日経緯、および、手段に関する調査考察を通して、彼らの日本における生活基盤の形成、特に、日本において、彼らがイスラーム教徒として、いかに生活基盤を形成しているかを示した。また、[安瓦尔安蒂娜 2008]<sup>10)</sup>において、日本における中国ウイグル族が、日本社会の中で、いかに日本人、中国人（主に漢族）、他国のイスラーム教徒との生活、社会関係、その社会的ネットワークを形成したかを示した。

しかしながら、言語とアイデンティティを取り扱った研究はなかった。そこで、筆者は、以前、[Abudurexiti 2011]<sup>11)</sup>、[Abudurexiti 2015]<sup>12)</sup>において、在日ウイグル人に関して、その来日目的、および、経緯に関する調査研究を通して、多言語社会における複数の言語文化の持ち主として、彼らが各言語に対してどのようなイメージを持っているかについて分析、考察を行った。すなわち、在日ウイグル人には、自分は何者なのかという「とまどい」を示す者が多く存在しており、この「とまどい」を言語の視点から論じた。また彼らのアイデンティティは、「アイデンティティの分裂」と言うべき状態にあるが、国際化に適応したアイデンティティの新しいあり方へと発展していくものであるとも考えられ、従来持っていたアイデンティティは「分裂」したが、多面的アイデンティティの確立につながっていく状況を述べた。

また、[Abudurexiti 2011]<sup>13)</sup>において、急速に変化している複雑な社会環境の中で、多民族、多文化国家になりつつある日本に在住するウイグル人の言語に関する使用、選択やそれに対する

想い（言語意識）を手がかりに、社会構造と文化構造（アイデンティティ）の関係を考察した。その手法としては、先ず、アイデンティティを捉ええる視点を「信念や感情等の総体」との概念規定を行った。そして、その視点を使い、来日前、母国である中国で受けた教育言語の違いにより、彼らを「民考民<sup>14)</sup>・民考漢<sup>15)</sup>」、「一世・二世」に分け、両者のインタビュー・アンケート調査結果を比較しながら、現れた言語意識の違い、および、その背後に働く原理を考察し、そこに見られる言語アイデンティティの形成過程や維持の仕方に違いがあることを指摘した。

本稿においては、在日ウイグル人を対象に行ったインタビュー・アンケート調査の結果に関して、世代間（一世、二世、日本生まれ）の違い、来日前、中国で受けた教育言語の違い（「民考民」、「民考漢」）から、さらに詳細な比較分析を行った。その結果から、在日ウイグル人の各言語に対する意識の違い、および、その言語を選択する際にどのような意識が働き、その背後にどのような原理が働くのかに焦点を当て、より明確に描出し、これにより詳細な考察を加えた。また、言語が持つ実用機能、および、自己確認機能に注目し、在日ウイグル人がさらされている多言的言語状況が、これら、特に、自己確認機能に与える影響について指摘した。

## 1 研究方法と研究対象

本論で使用する調査は2009年2月から調査を行ってきた結果である。調査対象者全員が在日ウイグル人で、合計68名。また、来日前に彼らが受けた教育言語の違いにより、彼らを「民考民」、「民考漢」に分ける。「民考民」43名、男性23名、女性20名。「民考漢」23名、男性12名、女性11名。日本生まれの二世2名。今回の調査対象者の年齢は10代～50代。調査地は、比較的、在日ウイグル人が集中して居住している関東地区（東京、神奈川、千葉、埼玉）、および、関西地区（京都、大阪、兵庫）、そして、居住者自体は少ないが徳島<sup>16)</sup>である。在日ウイグル人に対する調査は難しい面を持っているが、個人、及び、在日ウイグル人友好団体へメールを送り、アンケート調査を行った。また、個別にインタビュー調査を行った。さらに、アンケート回答時、及び、インタビュー時の態度、表情などを記録し、その回答と比較することで、より正確な回答を得ることに努めた。その他、在日ウイグル人の地域毎の祭り・集いを企画し、イベント、誕生日パーティー等に参加し、観察等の研究方法も用いた<sup>17)</sup>。

## 2 アンケート調査結果と分析

### 2.1. 言語の選択と使用に影響を与える要因

多言語社会で対話（コミュニケーション）を行う際、どの言語を選び使用するかという問題は社会言語学では重要な研究テーマの1つである。「言語の選択と使用に影響を与える要因」としてこれまで考えられてきたのは、①対話者、②領域、③トピックという変項であった。対話者の社会、経済、政治、文化的地位が言語の日常的使用（慣用的使用）を決定づける<sup>18)</sup>。在日ウイグ

ル人社会での調査の結果、最大の影響を与えるのは「対話者」であることが判明した<sup>19)</sup>。

## 2.2. 言語選択と階層性

言語は階層性を有する。ある言語を使う者が如何なる社会、経済、政治、文化的力を持つかにより、その言語の影響力に差が現れるのである。これにより言語階層性が構成される<sup>20)</sup>。

### 2.2.1. 在日ウイグル人（「民考民」一世、二世、「民考漢」一世、二世、日本生まれの二世）社会での言語階層性（序列化）

表 2.1. 在日ウイグル人社会での言語階層性（序列化）は次のようになる<sup>21)</sup>。

| 順位 | 一世  |     |     |     | 二世（中国出身） |     |     |     | 二世<br>（日本出身） |
|----|-----|-----|-----|-----|----------|-----|-----|-----|--------------|
|    | 民考民 |     | 民考漢 |     | 民考民      |     | 民考民 |     |              |
|    | 来日前 | 現在  | 来日前 | 現在  | 来日前      | 現在  | 来日前 | 現在  |              |
| 1  | ウ語  | 日本語 | 漢語  | 日本語 | ウ語       | 日本語 | 漢語  | 日本語 | 日本語          |
| 2  | 漢語  | ウ語  | ウ語  | ウ語  | 漢語       | ウ語  | ウ語  | ウ語  | 英語           |
| 3  | 英語  | 英語  | 英語  | 英語  |          | 英語  |     | 英語  | ウ語           |
| 4  | 他   | 漢語  | 他   | 漢語  |          | 漢語  |     | 漢語  |              |
| 5  |     | 他   |     | 他   |          |     |     |     |              |

注：ウ語とはウイグル語。漢語とは標準語中国語。他とは他言語。

「民考民」一世は、来日前、自身の生活、および、社会環境の中では、主にウイグル語を使用し、漢語の使用は、公的な場面（会議、政府公文書、職場昇進する用専門書籍）などに限られており、日常会話で使用されるのは職場ぐらいである。（中でも新疆南部出身者は漢語を使用する場面が最も少ない。）英語は職場での昇進試験を受けるとき、第二外国語として筆記試験を受けるとき以外には、社会、生活上では全く使用されない。しかし、来日後、彼らの生活環境は、ほとんど学校、アルバイト先になっており、それ以外、新疆出身者との私的な交流場面も減少するため、日本語が生活、学習上の第一言語となっている。外国での留学生活は非常に大きな寂しさをもたらすので、インターネット、電話などを使って新疆の親戚、親友などと連絡することは、彼らの自己アイデンティティを維持する手段の一つである。もともと民族教育を受けた彼らは英語を学習する機会が比較的少なかったが、ごく一部の「民考民」は英語に興味を示す傾向がある。大学での英語科目履修（大学での英語科目は基礎から授業を始めるのではないので、「民考民」には少々難しくあるが）、民間の塾、個人レッスンなどの学習手段を使って、ある程度英語を学習した者もいる。彼らの入学した学校により、英語が要求される大学、大学院もあるため、英語能力も重要になっている。その一方で、彼らには、来日後、漢語使用の環境が全くない。また、在日中国人（漢族）と生活習慣、宗教信仰が異なっているため、在日中国人（漢族）との交流もほとんどなく、漢語の社会機能が日本での彼らの社会環境においてまったく作用しなくなっている。

「民考漢」一世は、来日前、「民考民」一世と少々異なり、漢語学校に通っていたため、そのほとんどは、母語（ウイグル語）より漢語能力が優れている。同級生、友人も漢族、あるいは、漢語ができる者のほうが多い。職場でも漢語の障害がないため、漢族の同僚とも交流する場面が多い。いずれの場面でも漢語を第一言語として使ってきた。生活、および、社会環境、主に家庭内ではウイグル語を使用するが、ウイグル語で教育を受けたことはなく（彼らの一部は家庭内で簡単なウイグル語教育を受けたケースがある）、母語（ウイグル語）のレベルはあまり高くない。

また、彼らは漢語学校に通っていたため、漢族学生と同様に英語教育を受ける機会があった。英語の基礎的な知識、能力を持ち、音楽、映画などの簡単な英語を楽しめる。また、母語（ウイグル語）があまりできないため、「民考民」にからかわれ、プライドを傷つけられる反面、英語ができることで、概して英語のできない「民考民」を見下し、プライドを保つところもある。彼らの一部には、英語で高い職業的な地位を得る者もいるが、英語はあくまで彼らを“かっこうよく”みせる手段の一つになっている。彼らが漢語教育、および、英語教育を受けたことは、来日後、彼らの日本語学習、その中でも、漢字、および、カタカナ学習に大きくプラスになっている。特に、進学の際、英語ができることで、「民考民」より選択肢が多くなっている。日本で学習、研究を行う限り、彼らも「民考民」と同様に、日本語が第一言語となるが、それ以外に彼らは、自身が最も得意とする漢語による漢語圏の者との付き合いのほか、母語（ウイグル語）話者との関係についても、出国前より大切にするようになっていく。これはあくまで印象のレベルであるが、全調査対象者のほとんどが、「民考漢」のウイグル語のレベルは、来日時（知り合ったばかりの時）より概して高くなったと語っている。日本での忙しい生活の中、新疆と連絡を取る時、ウイグル語を使用するという事は、母語（ウイグル語）の機能が彼らの生活で大きくなっていることを表しているようだ。

「民考民」二世は、ほとんど日本に留学している親に連れられて来日している。彼らは、来日前、祖父母、あるいは、親戚に預けられていたため、その生活環境の中で、主にウイグル語を使用していた。ただ、バイリンガル幼稚園（ウイグル語、漢語併用）に通っていた二世は漢語を使用できる。彼らは、日本の学校に入学後、一、二年で、そのほとんどの者が親より発音から文法に至るまで正しい日本語を身につける。彼らにとって、日本語が第一言語になっているのである。母語（ウイグル語）を維持するために、家庭内では、親は母語で話かけるが、「民考民」二世は、場合により、日本語で答えるケースも多い。また、もともと漢語使用の場面が少なかった彼らは、日本でほとんど在日中国人（漢族）と接する機会がないため、漢語の機能を発揮する機会はない。

「民考漢」二世は、「民考民」二世と同様、ほとんど日本に留学している親に連れられて来日している。彼らも、祖父母、あるいは、親戚に預けられていたが、「民考民」二世と違い、漢語学校に通っていたため、母語（ウイグル語）より漢語能力が優れている。同級生、友人も漢族、あるいは、漢語ができる者のほうが多い。彼らは漢語を第一言語として使ってきた。生活、および、社会環境の中、特に、家庭内ではウイグル語を使用するが、母語（ウイグル語）で教育を受

けたことはなく、母語（ウイグル語）レベルはあまり高くない。彼らは、漢語学校に通っていたので、漢族学生と同様に英語教育を受ける機会があったため、英語の基礎的な知識、能力はある。彼らも、「民考民」二世と同様、一、二年で、そのほとんどの者が親より発音から文法に至るまで正しい日本語を身につける。彼らも日本語が第一言語になっているのである。また、これも「民考民」二世と同様、母語（ウイグル語）を維持するために、家庭内では、親は母語で話かけるが、彼らは、場合により、日本語で答えるケースが多い。しかし、彼らのウイグル語（母語）のレベルは来日前より高くなったケースもある。そして、もともと漢語を使用する「民考漢」二世であるが、親の生活圏に留まるので、在日中国人（漢族）と接する機会がないため、漢語の機能を発揮する機会は全くない。

日本生まれの二世の第一言語は日本語であるが、彼らは日本社会で生まれたため、日本社会に完全に入り込み、日本社会の一員として物事を考え、自分が日本人であり、在日ウイグル人と同じとは思えない。言語的にも、日本人と同様、高い職業的地位を得たいなら、英語だという意識がある。母語（ウイグル語）については、「民考民」、「民考漢」一世のような母語（ウイグル語）を維持しようとする傾向は強くない。家庭内で親に母語（ウイグル語）で話かけられたとしても、日本語で答える。

新しい環境で生活するには、そこで使用されている言語を使わなければ生きていけないということが重要なのである。つまり、生活の手段としての言語使用である。手段には目的がある。それは現実社会においては利潤の追求ということになり、経済的な「力」の前に、言語アイデンティティは萎んでしまうのである<sup>22)</sup>。

また、言語選択順の変化はそれぞれの地域性（例えば、地域経済の富貧、地域文化発展程度など）と結びつくアイデンティティのシンボルとして作用している<sup>23)</sup>。インタビューを行った在日ウイグル人「民考民」、民考漢」一世の中で7割の者が地方出身で、高い教育を受けた後に大都市に就職した者であり、彼らにとって言語とは階層を変える手段である。もちろん地方にいる時には、母語（ウイグル語）が主に使用されていたが、一旦社会に出て、高い職業的地位（公務員）を求める場合には、漢語が必然条件として求められる。特に、新疆南部では、漢語レベルの高いウイグル人公務員は昇進する機会が比較的多い<sup>24)</sup>。「民考民」、「民考漢」一世は、出国前、このような言語階層性により、漢語への切り替え機能をすでに一回起こしたことがあるので、来日後、日本語が高い職業的地位を得る手段であることを理解すれば、容易に意識を切り替える。そして、彼らの中で英語ができる者は、英語で学習、研究活動を進めるために、英語に切り替えるケースもあるが、極めて少ない<sup>25)</sup>。

2.2.2. 在日ウイグル人一世の言語選択（民考民、民考漢）<sup>26)</sup>

表 2.2. 在日ウイグル人一世の言語選択（民考民、民考漢）

単位：%

|     | 第一世（民考民） |    |    |     |     | 第一世（民考漢） |    |    |     |     |
|-----|----------|----|----|-----|-----|----------|----|----|-----|-----|
|     | 夫妻間      | 職場 | 学校 | 子供と | モスク | 夫妻間      | 職場 | 学校 | 子供と | モスク |
| 日本語 | 23       | 85 | 72 | 61  | 66  | 26       | 65 | 61 | 42  | 62  |
| ウ 語 | 75       | 1  | 2  | 33  | 13  | 40       |    |    | 25  | 5   |
| 英 語 | 1        | 10 | 18 | 1   | 20  | 2        | 25 | 27 | 4   | 25  |
| 漢 語 | 1        | 4  | 7  | 6   |     | 32       | 10 | 11 | 29  | 7   |
| 他言語 |          |    | 1  |     | 1   |          |    | 1  |     | 1   |

注：ウ語とはウイグル語。漢語とは標準語中国語。他とは他言語。

「民考民」一世の夫婦間で、話し相手が二人に限られる場合には、ほとんどウイグル語を使用するが、学校、職場の人間関係などを話題にする時には日本語も使用する。英語、漢語の固有名詞、専門用語などはそのまま使用する。職場の同僚はほとんど日本人なので、ほぼ日本語を使用するが、外国人であるため英語で話をかけられる場合もある。また、中国人であることから、たまに中国語圏からの来客があった場合、中国語通訳を行うケースもある。

そして、日本の大学、大学院では資料はほとんど日本語で書かれているが、これに関してはほぼ理解でき、使用することもできる。その一方、学習、研究を行う場合、英語、中国語の資料を必要とする場合もある。この場合、両言語のレベルが高くないため、1、2割程度しか理解できず、使用もできない。さらに、彼らの子供は日本の学校に通っているため、日本語を使用する場面が生活の内6割ぐらいを占める。母語（ウイグル語）を維持するため、家庭内で子供にウイグル語で話かける場合も多いが、子供がウイグル語で答える場合と日本語で答える場合、両方ある。

モスクでは『コーラン』を日本語と英語で翻訳、説明するので、ほとんど日本語と英語が用いられるが、ウイグル人に会った場合は、お互いウイグル語で話しかける。これは人間の最も原初的な感情が表われる母語（発生論的母語）<sup>27)</sup> が使用されと考えられる「祈り」においても、同様な傾向が見える。このように、モスクにおいても、ある意味で日本語・英語（混合表現を含む）が母語としての機能（機能的母語）<sup>28)</sup> を持っていると考えられることができるだろう。換言すれば、「母語こそ原初的な感情と結びつく」という従来の（発生論的）母語が言語アイデンティティの根源だとする考え方が十分でないことを意味する<sup>29)</sup>。

「民考漢」一世の夫婦間では、ウイグル語、漢語、日本語を使用する。彼らの言語使用は、来日前、一般的にウイグル語が2割5分、漢語が7割5分と言われるが、来日後は、ウイグル語が4割、漢語が3割、日本語が3割になる。来日前、ほとんど漢語を使用していた「民考漢」は、来日後、漢語使用の場面が減少し、母語（ウイグル語）の使用場面が増加し、母語（ウイグル語）に対するアイデンティティが強くなる傾向が見える。職場では日本語使用が6割を占め、英語、中国語が3割程度使用され、たまにウイグル語が使用される場合もある。「民考民」と同じ職場にいて、英語、中国語を使用する場合、「民考漢」が呼ばれる可能性が高い。大学、大学院

での学習、研究では、日本語が6割、英語、中国語が4割使用される。子供に対する教育に関しては多言語を使用する。日本語、ウイグル語はもちろん使用する。さらに、来日前、中国語をすでに習得している子供に対しては中国語を話す機会を与え、中国語は大言語の一つで、中国語ができれば、将来の選択肢が増えると意識させ、中国語を練習する場を設ける。また、もう一つの大言語である英語も使用するが、子供の英語レベルにもよるが、英語使用の場面は多くない。しかし、よく英語の音楽を流したり、映画を見せたりする。モスクで使用する言語はほとんど日本語と英語であるが、たまに在日ウイグル人、回族などとは、ウイグル語、漢語を使用する場合もある。

### 2.2.3. 在日ウイグル人二世の言語選択（民考民、民考漢）<sup>30)</sup>

表 2.3. 在日ウイグル人二世の言語選択（民考民）（民考漢）

単位：%

|       | 第二世(民考民)(中国出生) |    |       | 第二世(民考漢)(中国出生) |    |       | 第二世(日本出生) |    |       |
|-------|----------------|----|-------|----------------|----|-------|-----------|----|-------|
|       | 父母と            | 学校 | 兄弟姉妹間 | 父母と            | 学校 | 兄弟姉妹間 | 父母と       | 学校 | 兄弟姉妹間 |
| 日本語   | 76             | 98 | 90    | 64             | 95 | 93    | 98        | 94 | 98    |
| ウイグル語 | 23             |    | 10    | 30             |    | 5     | 1         |    | 1     |
| 英語    | 1              | 2  |       | 3              | 3  |       | 1         | 6  | 1     |
| 漢語    |                |    |       | 3              | 2  | 2     |           |    |       |
| 他言語   |                |    |       |                |    |       |           |    |       |
| 他言語   |                |    |       |                |    |       |           |    |       |

注：ウイグル語とはウイグル語。漢語とは標準語中国語。他とは他言語。

「民考民」二世は、来日前、すでにウイグル語を話せていたので、家庭内では親にウイグル語で話かけられることがしばしばある。しかし、彼らのウイグル語レベルは高くなく、答える時には日本語で話す場合が多い。兄弟姉妹間ではウイグル語を使用するが、長い会話にはならない。それ以外は、ほぼ9割日本語を使用する。学校では日本語以外に英語の授業がある。

「民考漢」二世、来日前、漢語学校に通っていたため、母語（ウイグル語）が弱い印象があるので、親がそれを念頭に入れ、母語を使用する言語環境がない日本で母語（ウイグル語）を忘れさせないため、子供に意識的にウイグル語で話かける。子供は日本語、ウイグル語で答えるが、単語レベルの英語、中国語で答える場合もある。学校ではほぼ日本語であるが、英語の授業もある。兄弟姉妹間でもほぼ日本語を使用するが、単語レベルのウイグル語、漢語で話すこともある。

日本生まれの在日ウイグル人二世は、自分のことを日本人と意識をしているので、いずれの場面でもほとんど日本語を用いる。日本語の文にウイグル語の単語を入れ、使用する場合もある。学校では英語学習に力を入れているようだ。

上述した通り、家庭でのウイグル語の使用に関しては、「民考民」、「民考漢」とともに、一世同士（夫妻間）より一世、二世間（父母、子供間）では減少し、居住地の言語である日本語の使用が激増していることが示されている。「どの言語を獲得すれば人生を送る上で有利か」という基

準に照らし、「民考民」、「民考漢」一世は共通した思考様式を採ったと考えられる。実利的効用が我が子の第一言語変更（第一言語獲得）に作用したことになる。第一言語は市場経済の原理により選択される傾向が強い。そこにはその子供の親の価値観や人生観が反映されている<sup>31)</sup>。

通常、アイデンティティを意識させられるのは差別が存在する時である。家庭とはそれを意識せずに済む場所である。そこで使われる言葉が母語（ウイグル語）から混合表現（ウイグル語と漢語・日本語）に変わりつつある。換言すれば、以前、拙稿<sup>32)</sup>で触れたが、在日ウイグル人二世では生活言語が母語の機能に取って代わりつつあることを明確に指摘できる。

### 3 実用機能と自己確認機能

#### 3.1. 二つの機能

言語には、他人に何かを伝達する機能がある。また、何かを要求したり、何かを依頼する機能がある。これを実用機能（practical function）と名づけたい。もう一つの機能としては、自分が何者であるかを確認する機能である。自分はウイグル語を話すからウイグル人だと意識したり、同郷の者とウイグル語で話をし、自分の故郷はウイグルだと再確認することである。これは自己確認機能（identifying function）と呼べるだろう。なお、本稿では「言語アイデンティティ」という用語を頻繁に用いているが、これは「言語によって確認された自己」と言い直すことができる。つまり、自己確認機能と重なるのである。

この二つの機能は、伝達する内容の透明さに関して、互いに相反する性質がある。実用機能では相手の意図をできるだけ正確に理解したい、また、相手にも自らの意図を正確に理解してもらいたいと考える。そこでは、共通理解に達するために言語を用いるのである。「わたし」と「日本人」の間の境界をなくそうとするのである。あまり自信のない日本語を用いる時には、「でしょう」「だよね」のような談話標識（discourse marker）を頻繁に用いて、自分の意図が正確に伝わっているか確認しながら話が進んでいく。そこではできるだけ言語の内容が互いに透明であろうとしている。

一方、言語の自己確認機能は、ある種の他人に対して、言語の意味内容を不透明にしようとする。つまり、実用機能の機能を制限することで成立する。日本人、ウイグル人が同一グループ内にいる場合、日本語で話をしている、日本人に聞かれたくない内容、例えば、政治的な話題とか、仲間の離婚・不倫などの話は、ウイグル語にコードが切り替えられる。これは、結果として、彼ら内部の連帯感を高めることになるが、同一グループ内の日本人は当惑することになる。このとき、「われわれウイグル人」と「かれら日本人」の間に明白な境界が引かれることになる。ウイグル語とは、自分たちだけが分かるがゆえに、自分たちの言語であり、自分たちだけの所有なのである。

### 3.2. 在日ウイグル人の言語的自己確認機能

多様な危機を意識した在日ウイグル人が自分達の言語・文化的権利を留保するためにウイグル語を使用するのは彼らのアイデンティティの主張である。つまり、これが自己確認機能である。前節で述べたとおり、特定の言語や表現を選択・使用して自己のアイデンティティを形成、確認、表出するアイデンティティ機能である<sup>33)</sup>。自分がどこに属し、他の民族集団とどこがどのように異なるかを示す上で母語は極めて重要な手段であるからだ。要するに、言語選択は人間の生き方を主張するものである。

また、これも前節で述べたが、同一グループ内に、日本人、ウイグル人がいる場合、日本人に聞かれたくない内容については、日本語からウイグル語にコードが切り替えられ、「われわれウイグル人」と「かれら日本人」の間に明白な境界が引かれるのである。つまり、実用機能の機能を制限することで、ある種の他人に対して、言語の意味内容を不透明にしようとするのである。これが言語的自己確認機能が持っているもう一つの機能である。

### 3.3. ウイグル人の自己確認

他国へ移住した者にとっては、一般的に、自己確認機能の言語と実用機能の言語が異なる場合が多い。日本在住のウイグル人にとって、自己確認機能の言語はウイグル語であるが、実用機能の言語は日本語である。これは公的な領域で用いる言語（実用機能の言語）と私的な領域で用いる言語（自己確認機能の言語）の2言語併用と言ってよい。

自己確認機能で使われる言語の領域として、家庭と交友の二つの場が挙げられる。しかし、在日ウイグル人の場合は肝心の家庭内において子供との間では母語が使われない。あるいは使えないという点に大きな特徴がある。そうすると、自己確認できるのは仲間たちとの交友の時だけである。家庭内で母語が使われない状態を補う意味で、互いの交友関係はきわめて親密なものになる傾向がある。

### 3.4. 在日ウイグル人に対するイメージ

日本に在住するウイグル人だが、総じて一世は母文化に対して肯定的なイメージを抱いていることが多い。一方、二世は幼い頃に来日、あるいは日本生まれの者が多い。彼らは日本で教育を受け、母国、母語、母文化に対しては、それほど親近感を示さない。家族の中でウイグル語を使用する家庭もあるが、日本の社会、学校の中で、容貌、および、国籍などにより、自分たちがどのようなイメージを持たれているのか十分に承知しているので、日本の社会、学校の中において様々な方法で対応しようとしている。例えば、中国語、英語の講師として働き、中国語、英語力を通して日本人に負けないとのプライドを持つ方法、携帯電話・自動車・高級レストランに関心を持ち、高い生活水準を楽しむという点にプライドを見つける方法などがあり、一概にどの方法を取っているとは言えないようである。

日本社会の中での在日ウイグル人に対するイメージは、日本人、及び、ウイグル人以外の在日

外国人のウイグル語に対する評価とつながる。人間は実用のためと割り切って使用する言語に関しては、どのような評価をされても構わないが、自己確認として使用する言語（自己の言語アイデンティティ）に関する評価には敏感になり、時として「とまどい」、「憤慨」を感じる。その結果、自己確認としての言語、つまり、母語の実用場面は少なくなる。実際に、二世の中にはウイグル語を使用する比率が非常に低く、そのレベルも日常会話の一番簡単な文、あるいは、単語レベルにとどまり、母語へのプライドをあまり持たない者もいる。

これらの対応策としてはいくつかの方法があるだろう。先ほど述べた対応策とも重なるのであるが、例えば、①日本語を自己確認の言語としていくことである。つまり、日本語への乗り換えであるが、二世は環境論的に見れば、日本語母語話者だが、一世は成人になってから学習を始めた場合が多いため、どうしても日本語の書き言葉という壁にあたり、その乗り換えも限界があるようだ。②中国語、英語を自己確認の言語とするのであるが、これはある程度うまくいっている。そして、中国語、英会話教室などで、児童向けの中国語、英語講師となり、中国語、英語を用いる自分への自信を深めていく。ただし、成人向けの中国語、英会話教室の講師などでは、中国語、英語母語話者の講師が優先される現状を見て、とまどい、失望を感じることもある。調査を行った二世の中には、中国語を学習するために北京に一年間留学した者が一人いるが、他の者は中国語を学習する意欲をあまり示さなかった。その一方、英語への学習意欲は非常に高かった。③ウイグル語の価値について、様々な機会を利用して、シルクロード文化に関心を持つ日本人や新疆人に訴えていくことが見られる。時々、民族、文化紹介のイベント、エスニック料理、民族舞踊などの紹介は行われるが、ウイグル語の紹介は極めて少ない。家庭内でウイグル語を使用する二世の中で、会話レベルを向上させたいという意味を示した者はわずか2割しかいなかった。④自分が複数の言語の使い手であるという事実を目を向けていく方法もある。基本的に日本語しか話せない日本人や英語しか話せない英米人というような一言語話者とは異なり、複数の言語の使い手であるという点に、自分の価値を発見していく方法である。

以上、いくつかの方法を示したが、これらの内、特に、④の方法は多元的言語アイデンティティの樹立へとつながっていく可能性が高く、注目に値する。

#### 4 根無し草としてのアイデンティティ

根無し草とよく言われるウイグル人のメンタリティーだが、10世紀前後に、イスラーム教を信仰し始め、その後、もともと使用してきた回鶻文字を放棄し、アラビア文字を用いてチュルク文化の一種であるウイグル文化を継承してきた。一方、宗教教育ではアラビア語、ペルシャ語学習がウイグル社会の主流だった。19世紀末、20世紀初頭、旧ソビエト社会主義の影響を受け、北新疆伊犁地区、タルバガタイ地区のウイグル人の中にはロシア語学校で教育を受けた者がかなりいた。1954年新疆解放以来、漢民族の大量移住により、漢語の社会的機能が日々重要になり、漢語を知らないと職に就けない状況になってきた。その結果、自らの言語を軽んじ、漢語の習得

に熱心になってしまうという傾向が出てきた。若者はアメリカ文化や日本文化などの外国文化に強くあこがれ、ハリウッド映画を見て、ジーンズをはき、インターネットゲームに夢中になり、ピザ、マクドナルドを食べていると指摘されている。

現状では、若者は経済的な苦境ゆえに、大学を卒業しても就職難で、故郷への愛着は薄れ、先進国への出国を求めている。海外にいる親戚のつてを頼って、出国をはかる者、それを希望する者が増えている。親戚の国外での成功談は、ウイグル人若者が集まると、よく語られる話題の一つである。新疆から毎年 3000 人ぐらい出国するが、約 50% は少数民族である<sup>34)</sup>。

多数の人が出国するありさまを見て、ウイグル人たちの exodus（大出国）が始まったとよく言われる。必ずしも好んで国外に飛び出していくのではないが、世界各地にウイグル人たちが散らばっている。留学生としては日本、アメリカ、移住者としては中東西アジア、中央アジア、ヨーロッパ、カナダ、オーストラリアへと出ていっている。

## 5 終わりに

国際化時代、流動化する社会の中で、言語アイデンティティのあり方も変わりつつある。この言語アイデンティティのあり方は、在日ウイグル人において、もっとも先駆的な形で現れているように思われる。それは、従来のような集団や家族という形での移住ではなく、個人という形での移住であるからである。彼らの中には、移住した土地の言語である日本語を真剣に習得しようとしている者もいるし、国際語である英語を武器にして収入の糧にしようとする者もいる。また、自動車を乗りまわし、携帯電話や国際電話でウイグル語や中国語を駆使しながら、日本国内外の仲間と常に連絡を取りあっている者もいる。それぞれが、自分なりの方法で、自分の言語アイデンティティの確立を模索していると言えるだろう。

もちろん、在日ウイグル人全員が、多元的な言語アイデンティティを確立しているなどと言うことはできない。しかし、自身が関与したすべての言語にアイデンティティを結びつけていくこと、そして多言語話者である点にプライドを持つこと、それによって多元的な言語アイデンティティを確立していく者がかなりいる。これは、流動化する現代社会を生きていく一つの有効な方法を示していると思われる。

在日ウイグル人の言語選択とアイデンティティに関して、民考民と民考漢、一世と二世（日本生まれを含む）という二項対立を用いる分析方法は、その差異や価値の明確に表すためには、極めて有効な手段である。これら個々の話者の言語とアイデンティティ形成との相関を「一言語＝一アイデンティティ」という視点からだけではなく、「複数言語＝複数アイデンティティ」と捉える発想が要求されていると思われる。

そして、また、多言語話者である在日ウイグル人の言語とアイデンティティの関わりを複数存在するものとして捉え、それらのアイデンティティが複合的アイデンティティの形をとりながら、どのように統合されていくのか。その志向性の考察と言語使用実態の詳細な実地観察を行うこと

が、多言語社会になりつつある日本に在住する多言語話者ウイグル人の現実に即した包括的な理解を可能にしてくれると考える。

## 注

- 1) 「第7表 都道府県別 本籍地別 外国人登録者（その1 中国）」『在留外国人統計』財団法人入管協会、平成23年版（<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111183>、表号11-99-07-1）によれば、2011年時点で日本在住新疆ウイグル自治区出身者の数は1884名である。この統計には、ウイグル人の他に、漢族、カザフ族、モンゴル族なども含まれており、所謂ウイグル人は千名前後と考えられる。なお、2012年以降の本籍地別外国人登録者データはまだ公表されていない。参照できるのは2011年までである。
- 2) アイデンティティ形成について Rodolfo A. Blatao. (1973) *Ethnic Attitudes in Five Philippine Cities*. (A Report Submitted to the Philippine Social Council Research Committee). (University of the Philippine Social Science Research Center) では、母語が民族的アイデンティティの決定において重要な役割を果たすとの結論を述べているが、多言語話者はその場の状況で一番好ましいと思われる民族的アイデンティティを示すために言語使用を流動的に選び取っている。
- 3) これは母語の定義が複数可能であるからである。母語の定義として、1) 個人の出自の観点から、一番初めに獲得した言語、2) 言語能力の観点から、一番良く理解できる言語、3) 言語使用の観点から、一番良く使う言語、4) しるしとして、自己存在と関係づけられる言語、または、他者から自己存在と関係づけられる言語。母語の定義に関しては、Tove Skutnabb-Kangas. (1984) *Bilingualism or not: The Education of Minorities*. (Clevedon, Avon: Multilingual Matters) Vol. 7, p. 18. と Tove Skutnabb-Kangas. (1988) "Multilingualism and the Education of Minority Children." *Minority Education: From Shame to Struggle*, eds. Tove Skutnabb-Kangas and Jim Cummins (Clevedon, Avon: Multilingual Matters) pp. 16-17. を参照。母語の分類の前提として、1) 個人が複数の母語を持つこと、2) 母語が生涯において幾度も変わりうること、3) 母語の定義が社会の言語権に対する意識程度により順序付けが可能であることという3つの点を上げている。このように様々な意味が込められている。新疆ウイグル自治区のような多言語状況下での出身者は、これらの分類項目による母語は、民族的・社会的背景によりそれぞれ異なり、複数の母語を持つことが可能になる。
- 4) 「ウイグル」が新疆に居住する大多数のトルコ系イスラーム教徒定住民を指す名称として公式に使用されるようになるのは1935年のことであり、また言語学の世界では彼らの話す言語は厳密には古代ウイグル語と区別するため「新ウイグル語」あるいは「現代ウイグル語」と呼ばれることが多い。本稿では便宜のため過去に遡る形で「ウイグル語」「ウイグル人」の呼称を用いる。小松久男編『中央ユーラシア史』（東京：山川出版社、2000年）376-377頁（濱田正美執筆）、『言語学大辞典』第2巻（東京：三省堂）282-288頁「新ウイグル語」の項（庄垣内正弘執筆）参照
- 5) 藤山正二郎「言語教育、実践共同体、身体知——ウイグルの漢語教育」（『福岡県立大学人間社会学部紀要』15巻2号、2007年3月）、Guljennet Anaytulla「新疆バイリンガル教育の興隆について——ウイグル社会を中心に」（『国際教育文化研究』5、2005年6月）、アナトラ グリジヤナティ「中国新疆ウイグル自治区における双語教育の現状と課題について——高等教育を中心に」（『九州教育学会研究紀要』34巻、2006年）、Guljennet Anaytulla「中国の少数民族双語教育における母語の位置づけ——新疆ウイグル自治区の民族教育をめぐる」（『国際教育文化研究』9、2009年6月）、王瓊「ウイグルにおける漢語バイリンガル教育の実際——教育者の視点から」（『〔中央大学〕大学院研究年報 総合政策研究科篇』9号、2005年）。

- 6) 藤山正二郎 (2010) 「ウイグル民族アイデンティティと民考漢の将来」『福岡県立大学人間社会学部紀要』Vol. 18、No. 2、1-12
- 7) 岡奈津子「カザフスタンのウイグル人 (特集 ウイグル人の現在 — 中国と中央アジアの間で)」(『アジア研ワールド・トレンド』11 巻 1 号、2005 年 1 月)、新免康「カザフスタンのウイグル人社会における学校教育と民族文化」(『歴史と地理』566、2003 年 8 月)。
- 8) 安瓦尔安蒂娜「日本における中国ウイグル族の生活実態に関する考察」(『甲南大学社会科学特集』151、2007 年)、安瓦尔安蒂娜 (2008) 「日本における中国ウイグル族の生活実態に関する再考 — その社会的ネットワークの形成を中心に」『甲南大学紀要 文学編』156、2008 年)。
- 9) [注] 8 を参照。
- 10) [注] 8 を参照。
- 11) Abudurexiti Abuduletifu 「在日ウイグル人の新しい言語アイデンティティ」『社会システム』(14 号、京都大学)
- 12) Abudurexiti Abuduletifu (2015) *The language Identity of Uyghurs in Japan*1. Journal for the Comparative Study of Civilizations, Reitaku University (Vol. 18 2015)
- 13) Abudurexiti Abuduletifu 「在日ウイグル人の言語使用とアイデンティティ — 「民考民」「民考漢」の言語意識調査から —」『民族紛争の背景に関する地政学的研究』(Vol. 18、大阪大学)
- 14) 馬戎、周星主編『21 世紀：文化自觉与跨文化対話』(二)、北京大学出版社、2001 年、第 826 頁。一般民族学校に通う少数民族学生「民考民」である。ここでの少数民族はウイグル人のみを指す。
- 15) J.J. Rudelson. (1997) *Oasis Identities: Uyghur Nationalism along China's Silk Road* (Columbia University Press), p. 128. 中国少数民族地域において、漢語教育中心の漢民族学校と少数民族教育中心の少数民族学校がある。少数民族で、漢民族の学校に通う者を「民考漢」という。ここでの少数民族はウイグル人のみを指す。
- 16) 徳島以外の調査地はウイグル人居住者が比較的多いところであるが、徳島は行く機会があり、調査を行った。
- 17) 来日後 12 年間、筆者が在日ウイグル人コミュニティと共に留學生活を送ることにより築いた信頼関係を基礎の上に、インタビュー、アンケート調査などを快諾 (許諾) してくれたが、在日ウイグル人はさまざまな要因で、このような深層的な調査には一般的には応じない傾向がある。答えたくない項目などがあれば、不回答でいいと筆者がまず約束することで、調査に応じてくれたケースもあり、断わられたケースもある。
- 18) 言葉のやり取りが行われる社会的、言語的環境が生み出す、期待、可能性、のことで「こういう場合にはこういう言語や言葉が使われる」といった類のものである。(小野原信善 (1998) 『フィリピン言語政策と英語』窓映社、1998 年、第 104 頁)。また、この調査結果については本稿表 2.2、表 2.3 を参照。
- 19) [注] 13 p. 93 を参照。
- 20) 田中春美, and 田中幸子. “社会言語学への招待.” 一社会・文化・コミュニケーション—ミネルヴァ書房 (1996)。
- 21) この表は、拙稿 [注] 13 p. 93 では、「民考民」「民考漢」の言語階層性分析に使用したが、本稿では「民考民」「民考漢」の言語選択、自己確認機能分析に使用する。
- 22) [注] 13 p. 94 を参照。
- 23) [注] 13 p. 94 を参照。
- 24) 「民考漢」の漢語使用状況については、Shirnay・Mesut 「‘民考漢’ 与双語現象」『語言与翻訳』(漢文)、2001 年第 1 期 (総第 65 期)、第 61-65 頁を参照。

- 25) [注] 13 p. 94 を参照。
- 26) [注] 21 を参照。
- 27) その一つは「子供が周りの人々が話す言葉に接し、臨界期、即ち、子供の言葉として同定され、確立される時期が終わるまでに第一言語として獲得した言葉」という定義（発生論的母語）である。  
Annamalai, E. (1998). Nativity of Language. In Singh, Rajendra (ed.). *The native speaker: Multilingual perspectives*. New Delhi/ Thousand Oaks / London: Sage, 148-157
- 28) 小野原信善「フィリピン上流階級子弟に見る言語使用と言語的アイデンティティ —— アンケート調査から ——」『アジア英語研究』第6号（日本「アジア英語」学会）、2004年、第35頁。
- 29) [注] 13 p. 94 を参照。
- 30) [注] 21 を参照。
- 31) [注] 13 p. 95 を参照。
- 32) [注] 13 を参照。
- 33) 言語の機能について、研究者により様々な分け方や用語があるが。本稿の趣旨に照らしこれを採る。
- 34) 天山網、2011年1月15日 21:34 アクセス。

#### 参考文献

- Annamalai, E. (1998). Nativity of Language. In Singh, Rajendra (ed.). *The native speaker: Multilingual perspectives*. New Delhi/ Thousand Oaks / London: Sage, 148-157
- Erikson, E. H. (1968) *Identity: Youth and Crisis*. (岩瀬庸理訳 [1973] 『アイデンティティ』 [金沢文庫])
- Fishman, Joshua A. (1999) *Handbook of Language and Identity*. (Oxford University Press.)
- Fishman, J. A. (ed.) (1999) *Language & Ethnic Identity*. (Oxford University Press.)
- 井出祥子 (1992) 「言語とアイデンティティ」月刊『言語』Vol. 21, No. 10. (大修館書店)
- 草津攻 (1977) 「アイデンティティと社会」『現代社会学第7巻』(講談社)
- 买买提力提甫、権藤與志夫、安尼瓦尔肉孜 (2003) 「中国青少年の価値観 —— 新疆ウイグル自治区の事例調査」『北見大学論叢』25-2
- 森岡他 (編) (1993) 『新社会学辞典』(有斐閣)
- 鵜飼幹八郎 (1990) 『アイデンティティの心理学』(講談社)
- 葉進 (1990) 「在日中国人留学生の推移と現状 (〈特集〉在日中国人留学その現状)」『季刊中国研究』Vol. 18
- 王建新 (1999) 「ウイグル人のイスラーム」新免康編『アジア遊学』1 勉誠出版

## 調査アンケート（一部）

調査日：

基本属性調査：年齢、性別、世代別、本籍、在留資格、職業、学歴、家庭（配偶者、子供）

あなたは「民考民」、「民考漢」ですか。

あなたの家庭内では何語を使用していますか。（夫婦間・親子間・子供間）

あなたの家庭以外では何語を使用していますか。（仕事場・学校・友達間）

あなたはモスクで何語を使用しますか。

お祈りする時に何語を使用しますか。

あなたは母語以外に何語ができますか。どのぐらいレベルですか。（聞く、話す、書き）

あなたが受けてきた教育言語は自身で選択しましたか。何故ですか。

もう一回選択するチャンスがありましたら、何語の教育を選択しますか。何故ですか。

あなたの子供の教育言語は子供自身が選択しましたか。何故ですか。

あなたの子供にもう一回チャンスを与えたら、何語の教育を選択しますか。何故ですか。

あなたは子供にウイグル語を継承して欲しいですか。

あなたは子供にウイグル語（会話・文字）を教えますか、どの程度で教えますか、なぜですか。

あなたは子供に漢語（会話・文字）を教えますか、どの程度で教えますか、なぜですか。

他に子供に何語を学ばせていますか。何故ですか。

あなたにとって一番大切な言語は何であるか。